

米大統領選後の安全保障の展望⑧

選挙結果が示す都市と郊外の深刻な分断とその意味

高橋 杉雄 政策研究部防衛政策研究室長

NIDS コメンタリー

第 156 号 2020 年 2 月 2 日

2020 年 11 月 3 日にアメリカ大統領選挙が行われ、大方の予想通り、民主党のバイデン氏が当選した。ペンシルバニアやアリゾナなどいくつかの州においてはごくわずかな票差となったが、最終的な大統領選挙人の数は民主党 306 対共和党 232 となり、くしくも 4 年前の 2016 年にトランプ氏とクリントン氏の間で戦われた選挙と同じ差となった。本稿では、現段階でインターネットで入手可能な範囲で投票データを詳しく分析し、近年の大統領選挙に共通する傾向と今後の分析視点を明らかにしておきたい。なお、本稿における投票データはアメリカの政治専門ウェブサイト「Politico.com」による。

1. 独特の戦略性が必要となる米国大統領選挙

よく知られるように、アメリカの大統領選挙の結果は全体の得票数によって決まるわけではない。州ごとに大統領選挙人の数が定められており、多くの州では少しでも多かった候補者がその選挙人をすべて獲得する（詳細は省略するが、メイン州とネブラスカ州が例外）。そのため、全体の得票数（一般投票数と呼ばれる）が多くても、大統領選挙人の獲得数が少ないために選挙に敗北する例もある。最近だと 2016 年のクリントンと 2000 年のゴアがその例となる。

この独特の制度のために、人口が相対的に少ない州でも選挙全体の帰趨に大きな影響力を持ちえる。例えば、一般投票数のみによって結果を決めるとした場合、候補者はおそらく人口の多いニューヨーク州やカリフォルニア州を重視した選挙戦略を立てるだろうし、現職大統領はそれらの州を重視した政策運営を行うだろう。ところが、現在の制度だと、どれほどニューヨーク州やカリフォルニア州で勝利したとしても獲得できる選挙人の数は合計で 84 人と決まっている（2021 年 1 月現在）。そのため、特定の人口の多い州に努力を集中させるのではなく、人口がある程度あって、キャストティングボートとなりえる州を重視した選挙戦略や政策運営が必要となってくる。

特に現在のアメリカにおいては、「レッドステート」と呼ばれる共和党を強固に支持する州と、「ブルーステート」と呼ばれる民主党を強固に支持する州、状況によってどちらかに振れる「スイングステート」と呼ばれる州にかなりはっきりと分かれている。例えば、全米 50 州のうち、2012 年、2016 年、2020 年と 3 回の選挙で続けて共和党の候補者を支持した州が 21 あり、これらが「レッドステート」となる。同じく民主党の候補者を支持した州も 21（これにワシントン特別行政区が加わる）あり、「ブルーステート」ということになる。つまり、全米 50 州のうち 42 州は、過去 3 回の選挙において支持の変化が見られなかったことになる。

例えば前述のニューヨーク州やカリフォルニア州は典型的なブルーステートであり、民主党はほぼ確実に勝利できる。そのため、民主党としては、これらの州ではなく、「スイングステート」であるペンシルバニア州やオハイオ州に努力を向けていくことになる。逆に共和党も、レッドステートであるテキサス州やオクラホマ

州はほぼ確実に取れるから、それらに加えて同じく「スイングステート」を重視していくことになる。大統領選挙人という独特の制度を取っていることによって、アメリカ大統領選挙には、どの州を押さえてどの州を取りに行くか、あるいは捨てるかという独特の戦略性やゲーム性が生まれているのである

2. 2016 年を振り返る

2020 年の選挙を見る前に、2016 年の選挙を振り返っておこう。2016 年の選挙を現職大統領だったバラク・オバマと共和党のミット・ロムニーの対決となった 2012 年と比較すると、2012 年に民主党が勝利した州のうち、アイオワ州、ウィスコンシン州、オハイオ州、ペンシルバニア州、フロリダ州、ミシガン州の 6 州において共和党が勝利している。つまり、これらの州が「スイング」したことになる。このとき、トランプが獲得した獲得した大統領選挙人は 306 人、クリントンが獲得したのは 232 人であるから、ペンシルバニア州（大統領選挙人 20 人）とフロリダ州（大統領選挙人 29 人）によって直接的に勝敗が左右されたといえる。

この 2 州における選挙結果を詳細に見てみると、興味深い共通点がある。いずれの州においても、都市部で民主党支持が強く、郊外で共和党支持が強いという顕著な傾向がみられるのである。表 1 はペンシルバニア州における 2012 年と 2016 年の得票を比較したものだが、2012 年では民主党が 290 万 7,448 票、共和党が 261 万 9,553 票を獲得したが、2016 年では共和党が 291 万 2,941 票を獲得し、284 万 4,705 票の民主党を上回った。特に際立つのは、民主党の得票が州内随一の大都会であるフィラデルフィアとその周辺に偏っていることである。

表 1：ペンシルバニア州における 2012 年と 2016 年の得票の比較

	フィラデルフィアおよび周辺 4 カウンティ		フィラデルフィア周辺以外の合計	
	2012 年	2016 年	2012 年	2016 年
共和党	645,121	652,275	1,974,432	2,260,666
民主党	1,232,268	1,286,823	1,675,180	1,557,882

フィラデルフィアおよびその通勤圏内である周辺の 4 カウンティの得票数を見ると、2012 年では民主党は 123 万 2,268 票を獲得したのに対し、共和党の獲得票数はその半分程度の 64 万 5,121 票にとどまる。2016 年においても民主党は 128 万 6,823 票を獲得し、共和党は 65 万 2,275 票にとどまっている。これが郊外になると状況は大きく変わる。フィラデルフィアおよび近郊を除いたカウンティの票数全体で見ると、2012 年では民主党が 167 万 5,180 票、共和党が 197 万 4,432 票なのに対し、2016 年では民主党が票を減らして 155 万 7,882 票となった一方、共和党が 226 万 666 票を獲得して大きく票を伸ばしている。

表 2 はフロリダ州における比較だが、ここでも同様の傾向を見て取れる。

表 2：フロリダ州における 2012 年と 2016 年の得票の比較

	マイアミ・タンパ周辺4カウンティ		その他の合計	
	2012 年	2016 年	2012 年	2016 年
共和党	1,073,495	1,128,877	3,088,586	3,476,638
民主党	1,683,782	1,847,795	2,551,488	2,637,950

都市部であるマイアミやタンパ周辺では、2012 年には民主党は 168 万 3,782 票を獲得しており、107 万 3,995 票の共和党に比べて優位に立っている。2016 年においても、民主党 184 万 7,795 票、共和党 112 万 8,877 票であり、差を広げている。しかしながら、それ以外の地域では、2012 年には民主党が 255 万 1,488 票、共和党が 308 万 8,586 票だったのに対し、2016 年には民主党がわずかに票を増やして 263 万 7,950 票となったのに対して、共和党は大きく伸ばして 347 万 6,638 票を獲得しており、都市部の劣勢を逆転している。

この、都市部が民主党優位、郊外が共和党優位という傾向は全米に共通してみられる。2016 年の選挙戦においては、クリントン候補は 2012 年のオバマよりも多くの票を都市部で獲得したにもかかわらず、共和党は郊外部でそれよりも多くの票を掘り起こし、都市部での劣勢を郊外で逆転し、トランプ氏が当選したのである。

3. 2020 年選挙戦

前述のとおり、2012 年、2016 年、2020 年の 3 回の大統領選挙を通じて、同じ政党の候補者を支持した州が 42 あるから、その 3 回のうちで何らかの「スイング」を起こしたのは合計で 8 州になる。うち 2012 年が民主党、2016 年が共和党で 2020 年に民主党に戻った州が上記のペンシルバニア、ミシガン、ウィスコンシン、2012 年と 2016 年は共和党支持だったが 2020 年に民主党支持に転じたのがアリゾナとジョージア、2012 年は民主党支持だったが 2016 年と 2020 年の 2 回続けて共和党支持だったのがオハイオ、フロリダ、アイオワである。

つまり、2020 年の選挙戦では、5 つの州において、2016 年にトランプを支持した州が民主党支持に変わったことになる。このうち、ペンシルバニア、ミシガン、ウィスコンシンは以前からスイングステートとみなされていた州だが、アリゾナとジョージアは基本的にはレッドステートとみなされていた州であり、驚くべき結果だったといえる。

このうち、選挙人の数を計算すると、アリゾナとジョージアをこれまで通り共和党が確保したうえで、ペンシルバニアで勝利していれば、トランプ氏が勝利したこととなる。そこで、この 3 州の選挙を分析してみたい。

(1) ペンシルバニア州の場合

まずペンシルバニアだが、民主党の伝統的な戦略は、大票田のフィラデルフィアで多数の票を確保しようとするものである。2016 年も、その観点から、クリントン氏は遊説の最後の地にフィラデルフィアを選び、実際にフィラデルフィアでは多数の票を獲得した。表 3 で見るように、2020 年においてもその図式は健在であり、フィラデルフィア及び周辺では 2016 年を大きく上回る票を獲得している。

表 3：ペンシルバニア州における 2016 年と 2020 年の得票の比較

	フィラデルフィアおよび周辺 4 カウンティ		フィラデルフィア周辺以外の合計	
	2016	2020	2016	2020
共和党	652,275	752,664 (+115.4%)	2,260,666	2,625,599 (+116.1%)
民主党	1,286,823	1,516,808 (+117.9%)	1,557,882	1,943,115 (+124.7%)

また、共和党も同様に都市部、郊外部を問わず票を上積みしている。注目されるのは、2012 年と 2016 年を比べた場合、民主党はフィラデルフィアを除いた地域において得票を減らしていたのに対し、2016 年と 2020 年を比較すると、その地域においても民主党が票の大幅な上積み成功していることである。共和党も、2012 年に比べて約 116%の票を獲得しており、上積みしているが、民主党は 2012 年に比べて約 125%の票を獲得している。この上積み結果、民主党は、フィラデルフィアの得票を郊外部の票で逆転されることを避けることができた。

(2) アリゾナ州の場合

アリゾナでは 2020 年についてはやや特殊な事情があった。アリゾナは、ベトナム戦争で捕虜にもなった「英雄」であり、上院議員のまま 2019 年に死去したジョン・マケイン氏の地元であり、伝統的にレッドステートであった。しかし、マケイン氏の死去に際し、現職大統領であったトランプ氏が侮辱的な言辞を述べたことから、マケイン支持グループが事実上造反した。興味深いのは、投票数それ自体が大幅に増加していることである。まず、民主党と共和党の得票数を合計すると、2016 年の 195 万 7,404 票から 333 万 3,829 票、すなわち約 170%増加している。

表 4：アリゾナ州における 2016 年と 2020 年の得票の比較

	フェニックス		フェニックス周辺以外	
	2016	2020	2016	2020
民主党	549,040	1,040,774 (+189.6%)	387,210	631,369 (+163.1%)
共和党	590,465	995,665 (+168.6%)	430,689	666,021 (+154.6%)

そして表 4 で示したとおり、都市部のフェニックスを見てみると、2016 年にはやはりレッドステートだけあって、共和党は民主党を上回る得票を得ている。しかし 2020 年には、民主党は約 190%と、共和党の約 169%を上回る割合で得票を増加させ、得票数を逆転させた。フェニックスを除いた地域においても、民主党の票の増加は 2016 年の約 163%に達し、共和党の約 155%を上回っている。

つまり、アリゾナでも、ペンシルバニア同様に、都市部か郊外部かを問わず、共和党も票を伸ばしたが民主党がそれ以上に票を伸ばしていることがわかる。ただし、前述したようにマケイン支持グループの造反を考慮

する必要があり、これをもってアリゾナがレッドステートからスイングステートに変化したかどうかは現段階では判断できない。

(3) ジョージア州の場合

もう一つ、レッドステートと目されているにもかかわらず民主党が獲得したジョージア州を見てみよう。実はジョージア州は、2016 年の段階でも民主党が勝利する可能性があるとして評価されていた州であり、クリントン陣営は、候補そのものの遊説はなかったがかなりの資金を投入していたとされている。というのも、やはり都市部であるアトランタ周辺で民主党支持層が拡大していたからである。

表 5：ジョージア州における 2016 年と 2020 年の得票の比較

	アトランタ周辺 9 カウンティ		アトランタ周辺以外	
	2016	2020	2016	2020
民主党	903,408	1,425,641 (+157.8%)	933,892	1,047,992 (+112.2%)
共和党	573,702	653,844 (+113.4%)	1,494,921	1,808,010 (+120.9%)

表 5 ではジョージア州の中でアトランタ周辺とそれ以外とを分けて票数を示しているが、確かに 2016 年の段階でも民主党の方が多くの票を得ている。それが、2020 年では約 158%と、共和党の 114%を大幅に上回る得票数の伸びを見せている。ただしアトランタ周辺を除いた郊外においては、共和党の方が相対的にも絶対的にも多くの票を得ている。この数字は、ジョージア州での民主党の勝利は、アトランタ周辺での民主党の得票数の著しい伸びによってもたらされたことを示している。

また、2021 年 1 月 6 日に行われた上院選決選投票でも、民主党の候補者はアトランタ周辺で多くの票を獲得し、共和党の候補者はそれ以外の地域で多くの票を獲得する傾向を観察することができる。

表 6：ジョージア州上院決選投票における両党の得票数の合計

	アトランタ周辺 9 カウンティ	アトランタ周辺以外
民主党	2656880 (得票の 58.3%)	1900907 (得票の 41.7%)
共和党	1236913 (得票の 28.1%)	3171861 (得票の 71.9%)

おわりに：民主党、共和党それぞれの今後の課題

2016 年大統領選挙のスイングステートでは、民主党は都市での得票を微増させることができた。これはオバマが圧勝した 2012 年を上回るものであったから、クリントンの敗北は「オバマが取っていた票を取れなかった」からではなく、「トランプが郊外の票を掘り起こした」ことによるものと考えられる。

本稿で見てきたように、2020 年のスイングステートでは、共和党、民主党ともトランプ支持と反トランプを軸として票を掘り起こし、共和党は郊外で、民主党は都市部でそれぞれ票を上積みした。そして今回は都市部の民主党の増加分が郊外部での共和党の増加分を遙かに上回り、バイデンが当選した。両党とも票を増加させているわけだから、2016 年にはトランプに投票したが、2020 年にバイデンに投票したという形での投票行動の「スイッチ」はほとんど起こっていないものと推測される。むしろ、2016 年には投票に行かなかったが今回行った層の中ではトランプ再選を望まない有権者が多く、結果としてバイデン支持票の方が多くなったとみるべきだろう。だとすれば、皮肉なことだが、共和党が「トランプによって得た票」よりも、民主党が「トランプによって得た票」の方が多く、それが故にバイデンが勝利したということなのかもしれない。そう考えると、2022 年の中間選挙や 2024 年の次期大統領選挙で勝利するためには、共和党の「脱トランプ」化は必要不可欠なものといえる。

一方、民主党の今回の目標はトランプ再選の阻止であり、政策の詳細は必ずしも詰められなかった。もともと、選挙中のレトリックと実際に行われる政策が一致していないことはよくあることではある。ただ、今回の選挙戦では、新型コロナウイルスの影響もあり、予備選が事実上途中で打ち切られる形になったことから、民主党は中道派と急進リベラル派の対立を一切整理することができなかった。その上で、「反トランプ」という一致点によって票を掘り起こして選挙に勝利したのである。このことは、実際に政策を運営していく上ではアキレス腱になりかねない。政権内における政策選好の幅がトランプ政権よりも広い可能性が高いだけでなく、予備選を通じての、いずれかの主張に対する正統性の付与や政治的リソースの再配分が行われていないからである。

本稿において 2016 年と 2020 年の選挙戦を比較してわかったことは、アメリカ国内の分極化とそれに伴う政党支持の二極化は、都市と郊外の分断という形で展開していることである。今後、共和党、民主党とも、自党に対する支持の弱い地域に対するアウトリーチを広げていくのか、あるいは既存の支持層に対する掘り起こしを重視していくのか。今後の政策の方向性は、どちらを志向していくかに大きく影響を受ける。対外政策の優先順位は、その中では相対的にかなり低いものとなろう。これが、同盟国と世界が向き合っていかなければならない「アメリカの現実」なのである。

プロフィール

profile

政策研究部

防衛政策研究室長

高橋 杉雄

専門分野：

国際安全保障論、現代軍事戦略論、日米関係論

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29171）

F A X：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>